
旨い酒には極上の肴

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旨い酒には極上の肴

【Nコード】

N2268BA

【作者名】

阿佐木 零

【あらすじ】

pixivにて投稿したSSのひとつになります。

地底を盛り上げるべく地霊殿主催で祭を行う事になり、準備から当日までばたばたする話です。

（前書き）

飲んで歌って騒いで喧嘩する祭はまさしく鬼である勇儀を象徴するものではないかな、と思ったり。そんな光景が頭に浮かんだ事から書いてみた物語です。

唇からするりと入った液体が、喉を焼き腹を満たしていく。

同時に体が熱くなつていくのを感じ、開け放った窓から吹き込む冷たい風が冷やして行ってくれる。

そうして何杯になるかわからない酒を飲んだ後、外から入る雑音に耳を傾けた。

「……うるさいもんだ」

言っておいて何だけど、言葉とは裏腹に機嫌自体は悪くない。むしろ時折聞こえてくる活気溢れる声に駆け出したくすらなっている。

自然と喉の奥からこみ上げてくる笑いを飲み下し、立ち上がる。

「さて、行くでしょうか」

麩を開けると更に声が大きくなり、そこかしこから笑い声が立ち上がり私の感情は嫌でも高ぶってくる。

「ふふっ、悪くないもんだね」

笑みを浮かべた私に頷くように、腰に下げた徳利の中で酒が跳ねた。

それは確か、いつものように酒を片手に地霊殿へ遊びに行った時

だった。

地霊殿執務室 要はさとの仕事部屋なんだけれども できとりが両手で頭を抱えて悩んでいたのだ。

何でも、とある神社によって直通エレベーターが作られた今、以前よりも多少は簡単に地上と行き来が出来るようになってはいるが逆に深刻な悩みが出来てしまっているようだった。

つまり、

「……地底を賑やかにするにはどうしたらいいんでしょうか？」

絶望にも似た沈んだ声音で地霊殿の主、古明地さとりは呟いた。
ただっ広い広間に声だけが反響し、得も言われぬ虚しさに包まれた私は酒を一口飲む事にした。

「うーん、でも何かありますか？ あたいは今のままでもいいと思いますけど」

にやはは、と脳天気な燐が言うけれど、さとりは真剣なようだ。
更に項垂れ、ぼそりと告げる。

「燐だけじゃなく、みんなそうだから地底がどんどん暗くなっているの……暗い、暗い……そう、暗いの……」

「え、えーっと」

自分でも地雷を踏んだのがわかったのか燐が冷や汗を垂らす。同時に、救いを求めて視線を彷徨わせるとぴたりと空に止めて、

「うにゅ？」

首を傾げた空を見てため息をついた。

「やっぱ何でもない」

凄まじく失礼な隣だった。あんたも同じじゃないか。そしてこの流れだと次に刺されるのはわかってる。

「勇儀は何かある？ ほら、酒入ってる緩い頭でさ」

「ぶっ飛ばすよあんた」

賑わう事、ねえ。

私としてはどっちでもいいんだけど、さとの悩みもわからなくもない。私だって静かな地底の町よりも活気づいている町の方がいい。

静かに飲む酒も美味いけど、騒がしい中で飲む酒もまた美味しいもんだし。

「ねーねー、さとり様。何の話してるんですか？」

「空、貴方は……こほん。地底を賑やかにするにはどうしたらいいかって話してるの。何か良い案とかない？」

「んー」

顎に人差し指を当て、小首を傾げた空はうんうん頷いた後、ぱんと手を叩いた。

「前に緑の巫女から聞いたんだけど、地上には祭とかいうのがあるって！」

ふむ。なるほど、祭りか……。

悪く無い案かもしれない。

「へえ、悪くないね。私としては良い案じゃないかって思うよ、さとり」

人が集まる。地底の事も知ってもらえる。賑やかにもなる。準備とか細かい部分を見れば悪くない案じゃないだろうか。

「なるほど。一時的な手段としてはアリですね」

さとりも同じように考えたのか、しきりに頷いていた。

こうして。

空の提案から始まった地底復興企画の第一弾が幕を明けたのだった。

休憩所となっている長屋から外に出ると、喧騒が耳朶を打った。いつもは閑散としている地霊殿まで続く長い通りは今や屋台が軒を連ね、等間隔を提灯で照らされている。

見るからに華やかになった通りは人や妖怪でこった返っていて、普段の姿からは想像出来ないくらいに騒がしい。

「さすが祭。やっぱり良いもんだね」

誰ともなしに呟いて酒を一口煽る。

普段は見れない姿に知らない内に心が踊っているのが自分でもわかる。さすがにはしゃいだりはしないけれど。

というか、鬼である私がこんな賑やかな場所で騒ぐと最悪祭りが即刻中止になりかねないしね。

さすがにそれは何というか……さとりがまた心労で倒れかねない。

「あうっ！」

「わ、っと」

考え事をしていたら小さいのがぶつかってきた。

私の腰ほどまでしかない、人間の子供だ。祭りの楽しい空気に引き寄せられて遊びに来たんだらう。

「う、ごめんなさい……」

私の角を見て妖怪だとわかったのか、怯えた様子で見上げていたので、頭においてくしゃくしゃにしてやる。

「わ、わわっ！」

「あはは、気にしないでいいよ。今日は特に無礼講なんだからね」

ニカッと笑うとその娘は顔を輝かせ、

「うんっ！」

大きく頷いてから駆けていった。

「じゃーねー、角のお姉ちゃん！」

「危ないからちゃんと前を向きな！」

やれやれ。

賑やかなのは子供達だけじゃないみたいだ。

騒がしさに釣られてやって来たのか妖精の姿も見かける。

「百発百中！　こんなのあたにかかればラクシヨーね！」

「だーからー！　的を凍らせるのはダメって行ったでしょ！　お店の人だって困ってるじゃない！」

露店荒らしに近いけど、まあ周りも楽しんでいるようだしいいか。良く見れば、その他にも見られない奴らは沢山いる。

「へえ、予想以上に混んでるじゃない」

「本当に。あ、橙。逸れないようにね」

「はい！」

普段は寝てばかりの大妖怪の姿まで見えるんだから、本当どれだけ注目を集めてるんだか。

いや、それだけ幻想郷が暇って事かね……？

ま、いいさ。

「さて……」

まだ祭りは始まったばかり。

今日は無礼講だって言ったばかり。本来の仕事もこなしつつ、私も屋台巡りしないかね。

まずは何から見てまわろうか。

私は近くにあった露店に顔を向けたのだった。

朝にたたき起こされてさとの執務室へと来てみれば、私以外はみんな集まっているようだった。

会議二日目。

いやもう何だかわからないけど、定例化が決定したようだった。執務室の壁にデカデカと

【祭、成功!!】

って書かれてある。標語の体裁すら整っていないけどきつと標語なんだろ。訳がわからない部分にさとりが追い詰められている何かを垣間見た気がする。

とにもかくにも、昨日の議題で祭りをやるというのは決まったのだけど、具体的にどんな祭りにするかまでは全く決まっていなかった。そもそもな話、私達にそんなの期待する方が間違ってるけど、さとりは微塵も思っていないらしい。

相変わらず良い娘だねえ……将来が心配になるよ。

「さて、皆さん祭をするに当たっての案はありますか？」

地霊殿執務室に集まっているのはさとり、燐、空、私こと勇儀、

パルスィ、ヤマメ、キスメだった。こいしはいつもの事ながらいい。

「ふうん、祭ね……また騒がしい企画を立ててるじゃない」

じとつとした目で言ったのはパルスィだ。橋姫のくせに何でこういうイベントが嫌いなんだか。

試しに訊いてみたら、静かな方が好きだから、だそうな。どうせ本音は恋人同士でイチヤイチヤしてるのを見て妬ましくなるからだっていうのは隠さなくてもみんなわかっている。

「はい。やっぱり地底にも賑やかさは必要だと思っんです。なので決めました、昨日」

「強引すぎるでしょ……」

さとりもわかってるんだろう。

さり気なく視線を空の方に向け、意を組んだパルスィもまた納得したように頷いていた。

うん、つまりはそういう事なんだ。

「うにゅ？」

空が忘れない内にさっさと決めてやっちゃおうって魂胆。

「それで、さとりはどうしたいのさ」

「私は……」

さとりは腕を組んでうんうんと唸りだす。

あー、これは訊いた私が馬鹿だったのかもしれない。

「えっと、何も問題が起こらないならそれで」

「何よそれ」

さとりが捻り出した答えに呆れ顔で言葉を返すパルスィ。気持ち
はわからなくもない。

でも、祭の中身ね。私としては何も着飾る必要なんて無いと思う
んだけども。

「さとり」

「はい？」

地底に籠ってると考えも暗くなるのか、それとも単に思いつかな
いだけか。

これだけのメンツが顔を突き合わせていても話は脱線しても良い
案はピクリとも出てこない。

「もう普通にやればいいんじゃないの？」

「はい？ 普通、ですか？」

「そう」

私はどかつとあぐらをかいて座り、腰に下げていた酒を煽り、さ
とりに向かって掲げてみせる。

「美味しい酒と美味しい飯、そして人。これだけありや祭なんて充分じ

やないの。余計なもんなんていらないさ」

そもそもの話で、何かに捧げたりする祭じゃないんだから、深く考える必要なんて無いんじゃないかって思う。

地底で人と妖怪入り乱れた祭を行う。

楽しんだらそれで成功。楽しかったら心が踊り、賑わいが溢れ、地底が暖かく包まれる。

上々じゃないか。

「あんたはただ酒が飲みたいだけでしょ？」

半眼で訴えてくるパルスィに、

「違うね、美味しい酒が飲みたいのさ。でもね、こういうのは雰囲気
が大事じゃないか。私は祭の雰囲気でも酔いたいんだよ」

やれやれ、と肩をすくめているパルスィだけど、断言してもいい。
祭には現れる。そういう妖怪なのだ、彼女は。

「そう、ですね。そうしましょう」

私の言葉を訊いて熟考していたさとりだったけど、何度も頷いて
決心したようだった。

「勇儀さんの仰るように普通に祭を執り行いましょう。私達だけじ
やなくて、地上の人たちや妖怪達も呼んでみんなで」

かくして、地底の祭は決まった。

人間も妖怪も神も天人も何もかも関係なく、飲んで歌って騒いで
楽しむための自分たちに捧げる祭が。

その日の内に号外として天狗によって幻想郷全体に便りが配られた事により、私達の想像以上の人数が集まったのはまた別の話だ。

果たして私があの時発言した以上の効果が出ているものだから、正直に言うと言っていると驚いていた。

「まさかここまで集まるなんてねえ」

酒を一口煽ってから通りを見渡すと、見知った顔があつた。そいつは尻尾を立てて興味津々に屋台に並べられている鰻に見入っていた。

店主が苦笑いを浮かべているあたり、どうせずっと張り付いているんだろう。

「お燐、どうしたんだい？」

「あ、勇儀。今忙しいから放っておいて！」

こつちを一瞬振り向いて、また視線を元に戻す。その前に涎を拭け。

「連れがすまないね」

「いえいえ」

店主は小さな羽をパタパタと動かして微笑んだ。雀の妖怪だろうか？ 人懐っこそうな顔で商売に向いてそうな印象を受けた。

放って置くと鰻に涎のタレを塗りたくりそんな燐を引っぺがし、

「とりあえず一人前をおくれ。コイツ張り付いてて邪魔だろ？」

私がお金を差し出すと、

「い、いえいえ！　ほら良い客寄せ　お客様の注意を引いてくださってますから」

「正直だね」

「あ、あははは……」

乾いた笑いを返す店主にお金を渡し、燐にご飯を与えて前に座らせる。

そして酒を一口飲んでから、

「じゃ、私はもう行くよ。何かあったらぶっ飛ばしてくれていいからね」

「いえ、さすがにお客さんですから」

燐を残してその場を後にする

「あつづ

！」。

どうせ猫舌なのを忘れて焼きたての鰻にかぶり付いたんだろう。見なくてもわかる。

燐の悲鳴につられてやってきたキスメに肩を竦めて後ろを指差す。

「あ、……くすつ、いつてきます」

「うん、頼むよ」

呆れ顔のキスメに後を任せ、私は祭の雑踏にまた潜りこんだ。

会議の結果、場所は地底の中でも地霊殿に向かって伸びている一番大きい通りを使う事になった。

そして長屋が軒を連ねている部分全部で屋台や出店を開き、通りに面している長屋も休憩所として使用する。

ただし、騒ぐのが大好きな人間と妖怪が集まるのは目に見えてるので、運営や監視役も必要になってくる。

これには私、勇儀とさとりが主だったの責任者として。後は天狗たちが助っ人で白狼天狗を、そして竹林の警備員が力を貸してくれる手はずとなった。

まさしく幻想郷を巻き込んだ祭になる。

「ふふつ、楽しみだね」

喧嘩と酒と祭はこれだから止められない。

心が踊るのと同時に笑っていたためか、さとりがおっかなびっくりな様子で視線を向けていた。

「な、何を笑っているんです？」

「ん、別に。ただ楽しいなって思ってたね」

通りに視線を向けると、さとりも釣られるように視線を向けた。
視線の先には、天狗の便りを見て集まった祭好き、騒ぐの大好き
な人間や妖怪達が共同で祭の準備を勤しんでいる。

白狼天狗達も警備として借りられて、今もしっかりと各自の仕事
に就いてくれている。

「隣たちは やっぱりいいね」

それに比べて地底の面子と来たら……。

「あの子たちは” ペット ” だから。祭を楽しんで欲しい気持ちもあ
りますし」

「そっか」

きつとこいしに話をふっ かけなかった理由のひとつもそれなんだ
ろう。

「ええ、お姉ちゃんですから」

「…… まったく」

どこか誇らしげに微笑むさとりは背伸びしているようで、でもし
っかり姉として立っている凛々しさもあって、

「わっ、ゆ、勇儀さん!？」

気が付けばさとの頭を撫でていた。

抗議の視線を向けてくるさとりから顔を背け、誤魔化すように酒
を煽る。

「もう。髪がくしゃくしゃになっちゃったじゃないですか」

とんてんかんかん。

とんてんかんかん。

屋台が組み立てられる音が地底に響く。

さとりの提案から始まった今回の祭だけど、それでもこうして見ていると心が騒ぐ。今か今かと楽しみでたまらない。

「ねえ、さとり」

「はい？」

「成功させようね」

「はい！」

こうして、祭の開催日は刻一刻と近付いてきていた。

喧騒に包まれている通りを地霊殿に向かっておおよそ半分は歩いた頃、大きな花火が上がった。

いや、あれは

「弾幕？」

赤と白、黒と白。

ふたつの影が祭の提灯と弾幕によって照らされ、空を舞っている。騒ぎを聞きつけた人や妖怪が騒ぎ出す。

「巫女と魔法使いよ。どっちが強いかな喧嘩になって始めちゃったわ」
「なるほど。で、パルスィ、あんたはここで何してんだい？」

「見物よ、見物」

酒を片手に意地の悪い笑みを浮かべている。
あのふたりを炊きつけた犯人がわかった気がする。

「酔ってるね、パルスィ」

「別に。あんた程じゃないわ、勇儀」

「さてね」

再び見上げると、ふたりは互いに罵り合いながら弾幕合戦しているが、前に見た時よりふらついているのがわかる。

大方、弾幕ごっこをおっ始める前に酒を飲んでいたからだろう。

「あの酔っぱらいが……」

頭が痛くなってきた。

人がせっかく祭の雰囲気を楽しんでるというのに、見事にぶち壊してくれた。

「だあー、邪魔よあんたら！」

騒ぎを聞きつけた白狼天狗たちがやってくるけど、蹴散らされてしまう。酔っ払っていても楽園の巫女である。

「くっ、ははは……」

急に笑いだした私を見てか、周囲がいつせいに距離を開けるが知った事じゃない。

何て言っ たって、祭での私の役目は

「祭をぶち壊してくれた責任は取ってもらっよ！」

そうして私は巫女と魔法使いに向かつて一気に地面を蹴った。

その後は なんとというか酷かった。

酒と喧嘩は何とやら。

大立ち回りのした拳句、白楼天狗どころか氷精やら何やら巻き込んで大事になってしまった。

祭そのものには何の問題も無く、死傷者もなく済んだのはいい。

ただ、

「 聞いてますか!？」

「も、もちろん!」

主催者である小さい地底の主の前で正座させられていた。

今回ばかりは私が悪い部分もあるから仕方ない。

「部分も？」

「ああいや、私が悪いんだよね、わかってるよ。うん、わかってる」

「まったく。取り押さえる側が暴れてどうするんですか」

「……そうだね。うん、わかってはいたんだよ」

あの後、三人で暴れまわっていたら騒ぎを知ったさとりが現れて、その隙に巫女と魔法使いは逃げ出した。

どうせまた祭に溶け込んで騒いでいるんだろうけど。

「はあ。霊夢さん達が来てる時点で何かしらの騒ぎが起こるだろうなあ、って思ってたはいたけど」

諦めにも似たため息をつくさとり。

想像以上の人数が集まっているのだ。裏方（私含む）としては大変なのは間違いない。

それぞれが自制を効かせてくれれば誰も文句は言わないけど、そこで自制を放り出すのが幻想郷の住人たる所以でもある。

「うう、頭が痛くなって……はっ、駄目よさとり。こんな程度で挫けちゃ駄目！」

さとりがいよいよもって壊れてきてる気がする。

痺れてきた足に鞭打って私は立ち上がる。

祭へと視線を送ると、見知った顔触れと視線が合った。

やれやれ。

「そうよ、無事に乗り切って地底って良い所だなー、住んじゃおうかなーって思ってもらうのが目的なんだから何かあったらもみ消してしまえばいいんだわ」

「てい」

バシィッ！

「いだっ！」

軽く頭をチョップしたら、さとりの顔が地面にぶつかった。

いやあ、

「酔ってるみたいだね、はっはっはっ」

「はっはっはっ、じゃないです！ 力加減を間違えたとかそういうレベルの力じゃなかったですよ！？ 頭が割れかけました。割れるかと思いました！」

「まあまあ、いいじゃないか」

「良いわけがありません！」

宥めても止まらないさとりの視線に入るように、体を少しだけずらす。

「大体、 あっ」

私は両手を上げて、視線を完全に譲る。

「　　そっか」

その光景を見てさとの顔が綻んだ。

怒りも愚痴も忘れて、ただただひとつの感情に飲まれていた。

「ねえ、さとり。改めて訊きたいんだけどさ」

私も同じように視線を向ける。

祭の賑わい溢れる通り。いつもは閑散としている寂しい通りだ。けど今は

提灯の灯火が地底を照らし

人の賑わいが活気を呼び

妖怪が騒ぎ

暗い地の底を鮮やかに彩っていた。

「開催して良かったかい？」

こいしも

隣も

空も

パルスィも

ヤマメも

キスメも

みんなが私たちを見て手を振っていた。

食べ物やお面、玩具など思い思いの戦利品を持ちながら。

「はい。もちろん」

そう言ったさとりの顔も同じように輝いていた。
私はいつものように徳利を掲げ、

「そっか」

一気に煽った。

「勇儀、さとり！ あんた達もこっちに來なさいよ！」

「あいよ！」

急かすパルスィに釣られるようにもう一度祭へと足を踏み出す。

いつもより賑わう地底はどこまでも輝いているようで。

地上から見上げる星空と同じように　もしかしたらそれ以上に。
私たちには輝いて見えていた。
だから当然のように

今日の酒は格別に美味かった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2268ba/>

旨い酒には極上の肴

2012年1月5日19時47分発行